国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈共同研究プロジェクト紹介〉独創・発展型：日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成
日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成：研究成果と今後の展望

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2015-10-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: パルデシ, プラシャント, PARDESHI, Prashant
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000728

国語研プロジェクトレビュー
NINJAL Project Review　Vol.4 No.1 pp.28–35（June 2013）

日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成
—研究成果と今後の展望—

Compilation of a Handbook of Usage of Japanese Basic Verbs for JFL Learners:
Research Outcomes and Future Prospects

プラシャント・パルデシ（Prashant PARDESHI）

1.　はじめに

コミュニケーションの基本単位となる文の骨格を決める重要な要素の一つが動詞である。日本語を外国語として学ぶ学習者にとって，日本語の運用能力を向上させるために使用頻度の高い基本動詞の体系的な学習が不可欠である。国立国語研究所では 2009 年 10 月から 2012 年 9 月にかけて日本語研究の成果を日本語教育に応用する目的で，共同研究プロジェクト「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」（以下, ハンドブックプロジェクト）を実施した。

本プロジェクトで作成している「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブック」（以下，ハンドブック）では編集方針，見出し語の内容，執筆・編集方法のいずれにおいても従来の辞書にはない新たな試みが行われている。本稿では，21 世紀の新たな「日本語学習辞書」，また「二言語（多言語）辞書」作成の一つのモデルとしてハンドブックプロジェクトの最終成果の一部を報告し，今後の展望を述べる[1]。

2.　ハンドブックプロジェクトについて

2.1　ハンドブックプロジェクトの概要

学習者が効率的に日本語を学習するためには使用頻度の高い基本動詞の体系的な学習，例えば，構文フレーム，文法情報（統語的な振る舞い），意味の拡張（多義ネットワーク），関連語等の把握が不可欠である。また，日本語の体系と学習者の母語の体系間の類似点や相違点を理解することにより学習効果がさらに上がると考えられる。本プロジェクトでは，言語学，日本語学，日本語教育学，認知言語学，コーパス言語学，対照言語学，第二言語習得研究，辞書編纂学といったさまざまな研究分野の最新の知見を取り入れ，世界中の日本語学習者の体系的かつ効率的な学習に役立つハンドブックのプロトタイプを開発し，それに基づいて，日・中，日・韓，日・マラーティー語の各対照版の作成を目指した。ハンドブックの作成には国内外 58 名（日本語母語話者 42 名，非母語話者 16 名）の共同研究者が携わり，複数の班に分かれて活動した[2]。

[1] 詳細な報告書（PDF 版）はプロジェクトのホームページ（http://www.ninjal.ac.jp/handbook/）で公開した。
[2] 詳細は上記ホームページを参照。

本プロジェクトでは，新たな日本語学習辞書/基本動詞用法辞典のプロトタイプを開発するという観点から，扱う動詞の数を絞ることにした。具体的には，「あがる」「あげる」「さがる」「さげる」「走る」「あげる（授受）」「もらう」「売る」「買う」「貸す」「借りる」の 11 動詞である。「あがる」「あげる」「さがる」「さげる」は有対の垂直方向の移動動詞，「走る」は水平方向の移動動詞，「あげる（授受）」「もらう」「売る」「買う」「貸す」「借りる」はさまざまなタイプのモノの移動に関する動詞である。いずれも多義動詞で，「あがる」は 19，そのペアの「あげる」は 22，「走る」については 11 の語義を立て，記述を行った。日本語版の 11 見出しの原稿を A4 サイズで印刷すると 170 ページを超える。この長さからもその記述内容の豊富さが窺える。

2.2　ハンドブックの特徴

本プロジェクトで開発しているハンドブックはオンラインで使用する電子媒体のもので，日本語教師および上級日本語学習者を対象としている。このハンドブックは基本動詞の意味と用法を調べる，いわゆる辞書機能以外に，基本動詞に関するリファレンスブックとして活用でき，イメージ（動詞のイメージを表す静止画や動画），サウンドファイル（音声付き例文）といった視聴覚コンテンツを利用した多角的な学習が可能である（詳細は 3 節を参照）。

このハンドブックの特徴としては，次のような点が挙げられる。

（1）正用と誤用両方のコーパスを利用した見出し語の執筆
（2）学習者に有用な誤用情報の記載
（3）認知言語学と対照言語学の知見の反映
（4）時空間の壁を超えた執筆・編集作業

以下，順に見ていこう。

（1）このハンドブックの大きな特徴の一つは，日本語母語話者の正用および日本語学習者の誤用のコーパスを利用した見出し語の執筆である。

正用のコーパスには『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を利用した。BCCWJ は，国立国語研究所が構築した日本語初の大規模均衡コーパスで，総語数は 1 億語を超える。この BCCWJ 用のオンライン検索ツールとして，NINJAL-LWP for BCCWJ（NLB）を国立国語研究所と Lago 言語研究所とで共同開発した[3]（次ページ図 1）。誤用のコーパスには寺村秀夫（1990）『外国人学習者の日本語誤用例集』（科学研究費報告書）を利用しており，本プロジェクトではこれを電子化・データベース化し，オンライン版の寺村誤用例集データベースを開発した[4]（次ページ図 2）。このデータベースでは，誤用の種類，学習者の国籍，作文形式などの複数の条件を指定して，誤用文を検索できる。

[3] 詳細はパルデシ・赤瀬川（2011）を参照。このツールは 2012 年 6 月から無償で公開されている。
http://nlb.ninjal.ac.jp/

[4] 2011 年 12 月から無償で公開されている。オンライン版のほか PDF 版も提供されている。
http://www.ninjal.ac.jp/teramuragoyoureishu/

図１　NLB の見出し語画面

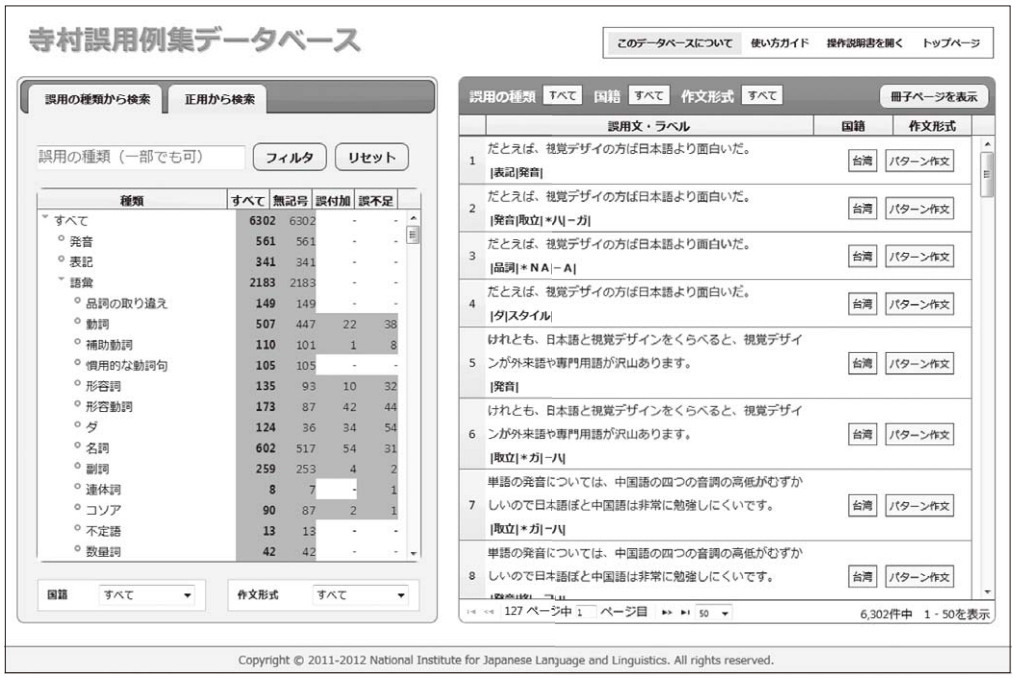

図２　寺村誤用例集データベースの検索画面

執筆者はこれらのツールを利用して，統語的および意味的な共起関係，実際の用例，学習者の誤用例などを参照しながら執筆を進めた。作例の作成に関して，当該動詞の統語的・意味的な振る舞い（例えば能動態と受動態，あるいは肯定形と否定形への偏り，よく共起する副詞など）を考慮に入れ，必要に応じて単文のみならず複文も導入している。また，音声面の特徴を把握できるようにすべての作例には音声ファイルを付けている。見出し語画面では作例のほか，NLB を利用して抽出した適切な実例も数例参照できる仕組みになっている（図3）。

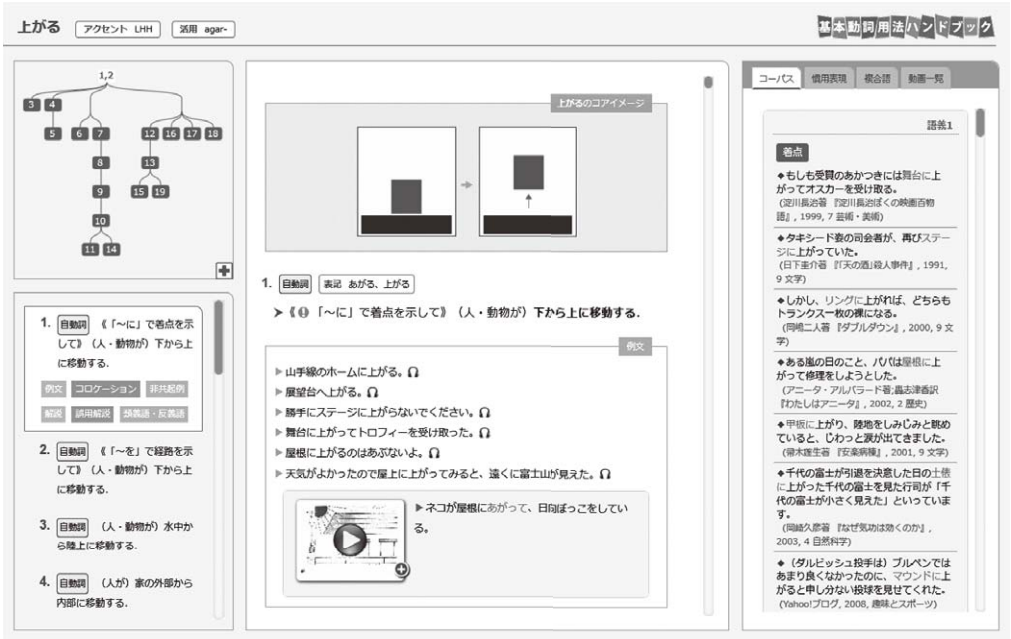

図3　ハンドブックの見出し語画面

（2）従来の辞典と異なり本ハンドブックでは，寺村誤用例集データベースおよび執筆者の経験に基づいて，非共起例など，学習者に有益な誤用情報を盛り込んでいる。次のように，通常共起する語句のみならず，共起しない・しにくい非共起例も合わせて載せている。

（共起例）　　切り立った崖を（命がけで）のぼる／よじのぼる。

（非共起例）　*切り立った崖を（命がけで）あがる。

また，推測される誤用およびその解説も加えられている。

（例）「階段を二階にあがる」などとは言いにくい。つまり，「あがる」は，〈経路〉を表す「を」格と〈到着点〉を表す「に」格を同時にはとらない。この場合，「階段をのぼって二階にあがる」「階段を使って二階にあがる」「階段で二階にあがる」などと言う。

（3）もう一つの大きな特徴は，認知言語学と対照言語学の知見の反映である。前者につい

ては多義語の意味拡張の背後にある認知的なメカニズム（多義ネットワーク）を提示し，語義間のつながりを視覚的に示している（前ページ図 3 の左上を参照）。後者について言えば，本ハンドブックでは日本（語）の文化的な情報に加え，各対照版では日本語と学習者の母語との相違点など対照研究の知見が数多く盛り込まれている。

（4）本プロジェクトでは，見出しの内容面に加えて，編集の方法に関しても，新たな試みを行った。時間と空間の壁を超え，日本，中国，インド間でネットを介して執筆・編集作業を行った（図 4）。

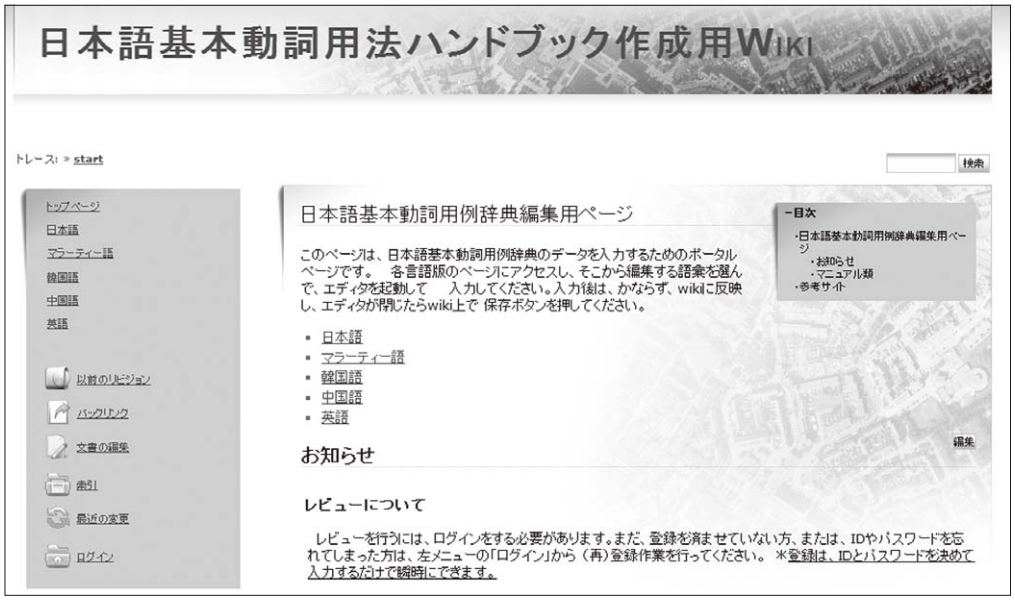

図 4　見出し執筆・編集ツール（エディタ）画面

以上述べたように，本ハンドブックは従来の辞書とは異なるユニークな特徴を持つことから本プロジェクトでは「辞書」ではなく「ハンドブック」という名称を用いている。

3.　視聴覚コンテンツの開発

本ハンドブックでは動詞の意味の理解および定着を促進するために視聴覚コンテンツを採用している。動詞の意味や用例を羅列する今までの辞書とは異なり，本プロジェクトが目指している語彙の習得を達成させることを念頭におき，学習者の認知プロセス，記憶プロセスを考慮した視聴覚コンテンツを開発している。

視聴覚コンテンツの一つ目はイメージスキーマで，ある動詞の意味を表示する際，本ハンドブックでは具体的な語義を提示する前にすべての語義の中核的な意味をイメージスキーマで表している（次ページ図 5）。また，意味の理解・記憶を促進するためにイラスト（連画）を利用して文脈，動作の準備段階，実行段階，完了後の一連の動作，コアイメージとの関連

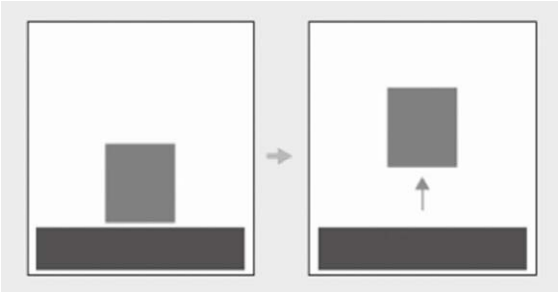

図５ 「あがる」のイメージスキーマ

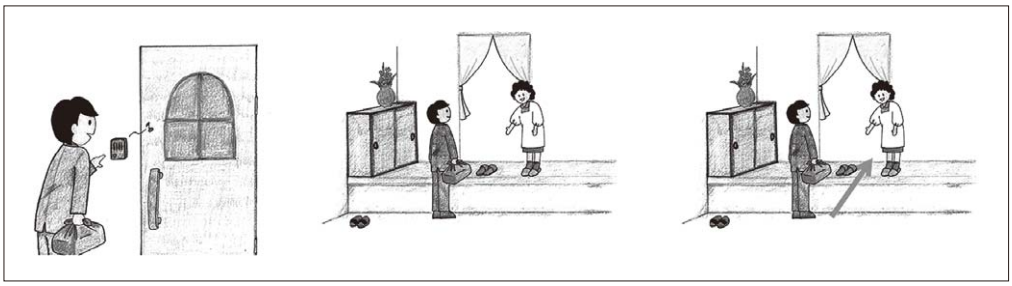

図６ イラスト「どうぞ，あがってください。」

図７ 動画「中村さんが階段をあがっていきます。」

性などが示される（図 6）。さらに，イメージスキーマやイラストなどで表現しにくい状況（例えば，話者の位置に左右される直時的な表現，アスペクトの解釈など）は動画を使って理解を促すよう試みている（図 7）。

イラストと動画は音声情報も含んでいる。動詞の語義によっては視覚化が困難なものもあるが，できるだけ視覚情報で表現できるよう工夫をしている。

4. 今後の展望

本プロジェクトではこれまでにない新しいタイプの辞書（ハンドブック）の作成を目指した。上述の通り，ハンドブックの見出し語は正用と誤用両方のコーパスデータに基づいて記述されており，執筆者の主観によって記述されている既存の辞書とは大きく異なる。また，認知言語学の知見に加えて日本語と学習者の母語との対照研究の知見を積極的に取り込んでいる。さらに，学習効果の向上のために視聴覚コンテンツも取り入れている。

ハンドブックプロジェクトの成果の一部を 2013 年度内にウェブで一般公開する予定である。公開後は世界中の日本語学習者，日本語教師からフィードバックを得て，記述内容とインターフェースを改善するとともに，見出し語の数を増やしていきたい。ハンドブックを多言語で展開するための仕組み（エディタ）はすでに整っており，中国語，韓国語，マラーティー語以外の言語でも協力者が得られれば展開が可能であるが，運営体制の強化・充実および予算の確保は大きな課題である。

本プロジェクトの成果は日本語教育・研究はもとより，対照言語研究，理論言語研究，コーパス日本語学等に寄与すると思われる。可能な範囲で今後もハンドブック作成作業を継続して進めたい。

なお，本稿は Pardeshi ほか（2012）をもとにしている。あわせて参照されたい。

●参照文献●

パルデシ，プラシャント・赤瀬川史朗（2011）「BCCWJ を活用した基本動詞ハンドブック作成―コーパスブラウジングシステム NINJAL-LWP の特長と機能―」『現代日本語書き言葉均衡コーパス完成記念講演会予稿集』205−216．東京：国立国語研究所．

Pardeshi, Prashant, Shingo Imai, Kazuyuki Kiryu, Sangmok Lee, Shiro Akasegawa and Yasunari Imamura（2012）Compilation of Japanese basic verb usage handbook for JFL learners: A project report. *Acta Linguistica Asiatica* 2（2）：37−64.（プロジェクトのホームページ（注 1 参照）からダウンロードできる）

《要旨》 本稿は，国立国語研究所で 2009 年 10 月から 2012 年 9 月にかけて実施した共同研究プロジェクト「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」の最終成果の一部を報告し，今後の展望を述べる。

Abstract: In this article we report partial outcomes of a collaborative research project entitled “Compilation of a Handbook of Usage of Japanese Basic Verbs for JFL Learners” conducted at the National Institute for Japanese Language and Linguistics from October 2009 through September 2012. We also describe future prospects.

プラシャント・パルデシ（Prashant PARDESHI）

国立国語研究所言語対照研究系教授。博士（学術）（神戸大学）。神戸大学人文学研究科講師，国立国語研究所言語対照研究系准教授を経て，2011 年 4 月より現職。

主な著書・論文：『自動詞・他動詞の対照』（シリーズ言語対照〈外から見る日本語〉第 4 巻，共編著，くろしお出版，2010），Semantic neutrality in complex predicates: Evidence from East and South Asia（with Peter Hook and Hsin-hsin Liang, *Linguistics* 50(3), 2012），The more in front, the later: The role of positional terms in time metaphors（with Kazuko Shinohara, *Journal of Pragmatics* 43, 2011），Toward a geotypology of EAT-expressions in languages of Asia: Visualizing areal patterns through WALS（『言語研究』130，2006），「「非意図的な出来事」の認知類型論：言語理論と言語教育の融合を目指して」（共著，『言語学と日本語教育 IV』，くろしお出版，2005）.

受賞：第 1 回「ことばと文化・教育」研究助成優秀賞（財団法人博報児童教育振興会，2007），The Chatterjee-Ramanujan Prize for Outstanding Student Contribution to The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics 2000（The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics, Sage Publications）.

独創・発展型共同研究プロジェクト「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」
プロジェクトリーダー　プラシャント・パルデシ
（国立国語研究所　言語対照研究系　教授）

プロジェクトの概要

コミュニケーションの基本単位となる文の骨格を決める重要な要素の一つが述語としての動詞である。日本語を外国語として学ぶ学習者にとって，日本語の運用能力を向上させるために，使用頻度の高い基本動詞の体系的な学習が不可欠である。具体的には，基本動詞の統語的振る舞い（格枠組み，受動形の有無，アスペクト的な特徴など），意味拡張（多義ネットワーク），自他の対をなすカウンターパートおよび類義語との対比等々の全体像を把握することが効率的な学習に必要なものである。さらに，日本語の体系だけでなく，母語の体系と日本語の体系間の類似点や相違点を理解することは学習効果を最大限に伸ばすことに役立つと考えられる。そこで，本プロジェクトは，言語学，日本語学，日本語教育学，認知言語学，コーパス言語学，対照言語学，第二言語習得研究，辞書編纂学などといったさまざまな研究分野の最新の知見を取り入れ，世界の日本語学習者の体系的かつ効率的な学習に役立つ「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブック」のプロトタイプを開発し，それに基づいて，日・中，日・韓，日・マラーティー語の試作版の作成を目指した。プロジェクトの成果物であるハンドブックは世界各国の日本語教育へ寄与することが期待される。